

知的障がい者のきょうだいにおけるライフコース選択のプロセス

笠田 舞

（東京大学大学院 教育学研究科）

【問題と目的】

障がいを持つ兄弟姉妹（以下、同胞）と兄弟姉妹（以下、きょうだい）であることは、きょうだいの親子関係や家庭生活を変容させ、彼らの心理社会的発達に影響を与えることが指摘されている。同時に、それぞれが自立を迎えていく青年期以降についても、Hodapp, R.M., Urbano, R.C., & Burke, M.M. (2010)の国際的なウェブ調査によれば、女性のきょうだいは結婚や出産が遅い傾向にあると報告されており、将来のケア責任を意識しているからこそ、きょうだいにとって自身のライフコース選択を行うことはしばしば大きな出来事になりうると考えられる。しかし、きょうだいがどのようなプロセスでライフコースを選択しているのかということは未だ明らかにされていない。そこで本研究ではきょうだいのライフコース選択のプロセスを示し、選択における迷いとその解決となった手がかりを明らかにすることを目的とした。その際、きょうだいのライフコース選択のプロセスを理解する試みとして、回想的な視点と逐次的な視点から検討するため、人生の折り返し地点でもある中年期のきょうだいと、現在主要なライフコース選択を行っている青年期のきょうだいを対象とした。

【方法】

知的障がい者の兄弟姉妹 26 名に対し、半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。協力者のうち、中年期のきょうだいは 14 名、青年期のきょうだいは 12 名であった。調査は 2010 年 6 月～10 月、2011 年 8 月に行い、得られたインタビューデータは逐語録を作成し、複線径路・等至性モデル（サトウ、2009）を援用し分析を行った。

【結果】

中年期・青年期のきょうだいのライフコース選択のプロセスをそれぞれ TEM 図に表した。そのうえで、2 つの世代に共通した選択における迷いとそれらを解決する手がかりとなったものとして、次の点が示された。まず、きょうだいは、同胞のケアに関わっていく可能性があるという当事者意識の中で、ライフコース選択を行っており、個人の自由な選択と家族の中で共有された同胞のケアに対する責任の間で迷いを感じやすいことが示された。次に親はきょうだいのライフコース選択のプロセスにおいて、ライフステージを超えたキーパーソンであること、そして親が直接的な言葉できょうだいの選択を支持し、自由な選択を保障する働きかけが、きょうだいの主体的なライフコース選択への大きなサポートになっていたことが示された。

【考察】

社会情勢や家族観が変化していてもなお、きょうだいが社会との関わり方を強く意識する進路や職業選択の時期には、同胞の障がいや今後のケアの在り方を巡る家族の問いについて、きょうだい自身も改めて考える機会となる。そしてケア提供者を期待されない子どもの役割から、同胞のサポートが担える役割へと大きな役割の変容の時期を迎えていた。次世代のケア提供者の役割を担いやすいきょうだいに対し、親がきょうだいの自由なライフコース選択を保障する働きかけをすることは、あくまでも兄弟姉妹の関係で在り続けるためのサポートになり、きょうだいの主体的なライフコース選択につながると考えられる。